文化

伊江隆人展

天地のとき

立体的に迫る実験作

星雅彦

いま、画廊匠（宜野湾市大山）では、伊江隆人展がひらかれている。87企画Ⅰである。白い壁面であるはずの室内は、水墨で塗りつぶされたように、壁面のサイズに合わせて大作三点が嵌（は）め込まれている。そこからは、作者がよりダイナミズムであろうとした心意気が、響いてくるようである。

伊江隆人は、基本的には墨象作家である。彼は伝統的な書道を破って、一筆を奔放に走らせる書による空間の新しい美を形成しようと努めてきた。そのような仕事はこれからも継続されるであろうが、一方では急速に抽象絵画の世界に入りこんでいった。それらの表現は、平面の空間バランス、塗りつぶした墨の濃淡による広がり、不定形なフォルムによるイメージの喚起性などを、自分の感覚と技術で表現するのに、方法論的に適性を得ているようである。そうした仕事を、抽象水墨と呼ぶこともできる。その上にさらにひと工夫して、油彩のマチェル作りの発想を引用するように、自作のコラージュともいうべき紙片を、貼り付ける作業を取り入れて、これまで幾つかの実験作を試みてきた。「目シリーズ」や「子供のくにシリーズ」もそうであったが、今回の「天地のとき」の三作は、集大成のような活力で、立体に迫る実験作である。それら作品が醸し出すものは、天地創造を思わせ、叙事詩的な展開といえるだろう。

二・五㍍×七・三㍍の作品は、布を墨に浸しながら木片や筆の操作で濃淡の陰影をつけて、別の墨象作品の布切れを貼りつけてある。ただしペったり貼りつけてなく、周りはひらひら浮いたようにしてある。二・五㍍×二・四㍍の正面にある作品は、三角や矩形のマスを障子の桟のような役目に表具して、大きな平面に段差をつくり、貼られた唐紙に、力強く数筆による墨象が表現されてある。左側の二・五㍍×三・三㍍の作品は、やはりキャラコの布を墨に浸して生乾きにさせ、それに筆で○△□を自在に大きく書きこんである。他に10号大の「さめよさめよ」一点、「無題」一点、「いろは」三点の小品もあるが、メインは言うまでもなく壁面を覆いつくした三点である。

ただ一言いえることは、伊江隆人の抽象水墨がどこへ行くか判然としないが、その力強い模索には常に期待感を抱かしめるものがあることだ。すっきりと決める垢（あか）抜けしたモダンアートのある一点から見れば、アンフォルメルは泥んこ（ドゥルブッタール）であり、隆人のそれは粗野に立ちこめる暗雲の風景に似ていて、筆さばきの冴えを見せてはいないかもしれない。が、空間の広がりと深さは彼ならではの逸才を示している、と言えるだろう。とにかく、見ごたえがある展示である。

（詩人）

同展は2月1日まで開催。

美術月評《1月》

自由奔放な作品群　伊江　隆人

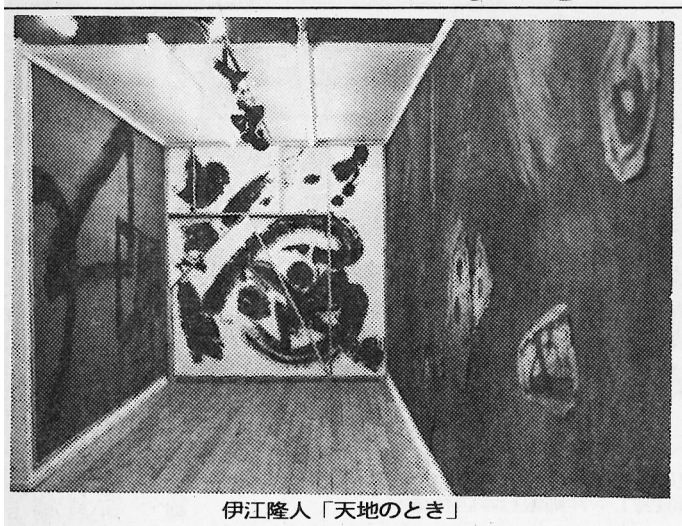
稲嶺成祚

伊江隆人展　今年のトップを切って開かれたのが伊江隆人展。「天地のとき」と題して三つの大作が並べられた。本来は三点を同一壁面に展示して一作品とする構想だったらしいが、今回は画廊の都合でコの字型に配列された。

左の作品には円の一部と三角、四角が筆太に描かれ、彼の従来の作風の拡大されたものとして受け取られるが、中央の作品は杉材によって七つに区分され、書は二つの異なる深さに配置されて木枠の落とす影で、その奥行き感の変化の効果をねらっている。

右側のもっとも大きな作品は、書のもつ白の余白を拒否するものとなった。背景は墨の灰色の調子で色付けされて、抽象絵画の背景となんら変わらない。しかも、ここで文字の代わりをするのが、はりつけられた布であり、それは中央部分のみ接着されて、端は浮き出ている。量感と動きを与えるためであるらしい。

他に「いろは」と題する作品もいくつかあったが、なかなか文字が読めない。作者にきくと、文字は倒して書いたり、逆さに書いたりしてあるのである。ここらあたりにも彼の自由奔放さがうかがえた。



伊江隆人「天地のとき」